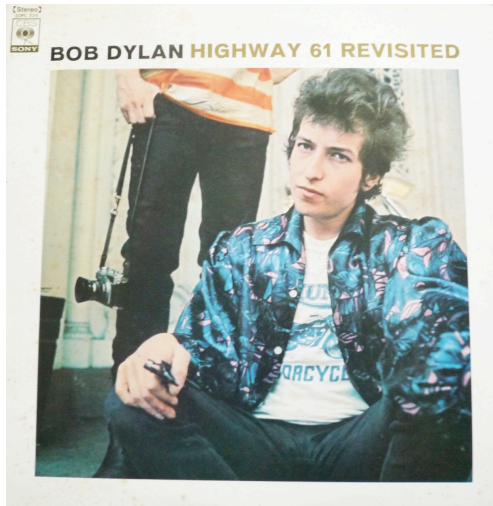




歌う詩人、歌わない詩人



長畑 明利 (英米文学)

2016年のノーベル文学賞は、アメリカのシンガー・ソングライター、ボブ・ディラン(1941～)が受賞しました。フォークもしくはロック歌手として知られるディランがノーベル文学賞を受賞したことで、多くの人が驚き、また授賞の是非を巡って侃々諤々の議論が起きました。授賞理由は「偉大なアメリカの歌の伝統の中で、新しい詩的表現を生み出したこと」です。ノーベル財団は、ディランが歌う歌詞を詩として評価したわけですが、この判断には、文学の範疇に、黙読されるものだけではなく、口承詩の伝統を引き継ぐ歌の歌詞をも加えようという意図が込められているはず。これまで、現代文学の世界で主として取り上げ

られてきたのは「歌わない詩人」たちの作品でした。しかしここに「歌う詩人」の作品も加えてはどうかというわけです。

このことについてはすでに様々な見解が述べられていますが、ここで触れておきたいのは、「歌わない詩人」たちの朗読です。歌われることを前提としない現代詩も、黙読されるだけでなく、しばしば朗読されてきたのです。詩に節をつけて歌うことと詩を朗読することは、どのように関連づけられるのでしょうか。詩の言葉を声に出して人に聞かせるという点で、両者には共通性がありますが、現代詩の朗読はおおむね日常言語の発話スタイルに基づいており、ディランの歌のように、特定の音階に乗せられた歌とは異質です。両者は同一とは言えませんが、W・B・イェイツ(1865-1939)やエズラ・パウンド(1885-1972)らの朗読を聞くと、彼らが朗読で日常言語の発話とは異なるものを目指していたことがわかります。(PennSound [<http://writing.upenn.edu/pennsound/>]などで聞いてみてください。)「歌わない詩人」による詩の朗読は歌への接近の試みなのか——ディランのノーベル賞受賞を機に、考えてみたいトピックです。(画像はボブ・ディランのレコード『追憶のハイウェイ 61』[1965]の日本版アルバム・ジャケット)

分野・専門紹介—File9

詩人の目、鳥の眸(め) ——英米文学への招待

分野・専門名：英米文学

英国の詩人ラルフ・ホジソン(Ralph Hodgson, 1871-1962)の詩「阿呆の街」(“Stupidity Street”)を日本語訳で紹介してみましょう。

ぼくは両目ではっきり見た
素敵な声で鳴く鳥が
店で売られているのを
食用に、
店で売られていたのさ
阿呆の街で。

ぼくが幻で見たのは
小麦のなかの虫、
だから店にはなにもありゃしない
食べられるものなんて、
何も売られていないのさ
阿呆の街では。

日本の俳人・加藤楸邨（1905-1993）の句「雉子の眸のかうかうとして賣られけり」を思い出させる、怖ろしい詩です。売られていく鳥をとおして人間の営みを透視するという点においても二つの詩はよく似ていると言えるでしょう。また楸邨の「かうかうとして」という鬼気迫る表現も、ホジソンの詩のタイトルと詩の中で繰り返される、人間の行為の愚かしさを弾劾するかのような音——[st]——とどこことなく似通っています。英語で詠われた詩の中に鳥の姿を探してみませんか。（滝川 睦・教授）

分野・専門紹介—File10

〈わからない〉から、〈わからない〉に向かって

分野・専門名：哲学

哲学を学ぶとはどういうことなのか、私にはわかりません。ここには、私個人が言葉の日常的な意味において哲学の初心者だから、ということにとどまらないものが含まれているのでしょうか。つまり哲学の学としての独自性が関わっているのです。普通、学問というものは、〈わかる〉ということの積み重ねです。しかし、哲学は学べば学ぶほど〈わからない〉が深まっていくようなのです。

一般に、哲学は難しい言葉と格闘するものと考えられています。確かに、多くの哲学書には難しい言葉が使われていますし、その意味を解き明かすことは大切な仕事です。また、哲学書を読んでいると、ふと、視界が開けて、すべての物事が新しい光の下で見られるということがあります。これは素晴らしい貴重な経験です。しかし、これらが哲学を本当に学ぶことかと言われると、ちょっと素直に頷けない。

私はハイデガーという哲学者の研究をしています。ハイデガーは〈存在〉の意味を問います。〈存在〉とは、つまり、机、キーボード、窓、鳥、人間、そういった様々なものが、様々な仕方で〈在る〉ということ。このことの意味をハイデガーは問い、独特な言葉遣いと込み入った論理で論じます。もちろん、それを解きほぐすことはとても難しい。しかし、私は、ハイデガーの思考の端緒、つまり、〈存在〉というものが問うに値するものだということを理解することが、実は一番難しく同時に一番大切なのではないかと思うのです。しかし、私たちはすぐにそれを見失ってしまう。——私たちは、常に〈わからない〉ということから、そして繰り返しそこに向かって、学び直さなくてはならないようなのです。（画像はハイデガーが活躍したフライブルク大学哲学部のアリストテレス像）（南部 正裕・前期課程1年）



最近の文学部

ことばの習得を超えて...

新体制となった名大文学部では言語教育がさらに充実しました。英語だけでも今回ご紹介した英米文学、英語学、英語教育（大学院）など。その他様々な言語の実践能力を武器に研究を進める各学問分野に触れることができます。（YK 記）

*本紙では、名大文学部の多彩な内容を順に紹介していきますが、それまで待てない人は...
名大文学部のWEBサイト <http://www.lit.nagoya-u.ac.jp/> まで（『月刊名大文学部』のバックナンバーもあります）